

第2分科会 「地域振興」～地域活性化へのプログラム

基調講演



(社)日本技術士会北海道支部／北海道技術士センター
地域産業研究会会長 船越 元 技術士



講演風景



会場風景

●講演要旨

基調講演：「技術士として地域社会貢献を」と熱く語る

地方の時代、自立の時代と言われて久しいが、「自立のための方針をしめして欲しい、地方が生きていける支援が欲しい。」という中央依存の声が未だある。自立の時代に必要なのは自分(地域)で考え、自ら(地域として)行動することである。様々な活動をとおして社会貢献してきた技術士だが、国の基準や指導に基づいて活動を行ってきた結果、地域住民との接触が希薄になり、地域の持つ可能性が見えなかった。反面、住民サイドからは技術士の姿が見え難かったのではないかと。

地方自立時代の技術士の役割は、地域と連携し、技術を通して地域住民と語り合い、地域の可能性を発掘していくことである。技術士には①市民の多様な感覚、目線を共有すること②既存概念にとらわれない自由な発想を持つこと③地方基準を作る能力と勇気を持つこと④ものごとを俯瞰的に見る必要があること、これらが埋もれた資源を見つける観察力となる。

すなわち、厳しい自然条件というハンデ、野生動物、廃棄物などは発想を替えば、冷熱エネルギー、有害獣の有価値化、バイオマス燃料など地域資源となり得る。

技術士諸兄／ 依存的・横並び発想は止め、自らの発想と行動で地域を蘇らそう。「座して餌をねだる熊牧場のヒグマ」の様に中央におねだりする地方から、脱皮しよう。餌は不味いが、外には自由がある。

●パネルディスカッション要旨

会場で挙手によるアンケートの結果、118名の参加者の内、21%にあたる技術士が社会貢献をしてきたと回答があった。社会貢献の概要についてフロアーと簡単な意見交換に続きパネルリストの話題提供に入った。

1) 岩崎技術士：「共に学び」「共に感じ」「共に創る」

地域と対話するとき、技術士を意識しないコミュニケーションが技術士の社会貢献の前提になる。5年間の活動の成果として、地域との信頼関係が築け、行政と住民が行動するようになったことである。今後も、地域活性化の触媒となり、また、良きサポーターとして活動していく。

2) 孫田技術士：「北の里山」に遊ぶ

札幌市に提案した「市民が入れる森を創る」を実践している。市民と同じ目線ではなく、市民として活動している。技術士としての経験を活かし、行政と市民の考え方、言葉のギャップを埋める役を果たしている。集う人が増えれば何か繋がる。



会場風景

パネルディスカッション



討論風景



第2分科会コーディネーター 油津雄夫 技術士

3) 岡田技術士：「知られざる湿原の魅力」
一市民の感覚で湿原の保全プロジェクト「湿原に見られる多様なかたち」に参画した。自ら小型軽飛行機を操縦し、50箇所の湿原を撮影記録した。貢献というのは後付けであり、自分自身が楽しむことが長続きする秘訣。湿原をより優れた状態で次世代に引き継ぎたいと活動を続ける。

4) 五十嵐技術士：「エゾシカ飼うべ」が北海道を救う。
害獣として邪魔者扱いされているエゾシカを地域資源として捉え、家畜化し、中山間地に新たな産業を興そうと、家畜の専門外の多様な技術士が集まって構想を練り上げ、世に問うた。技術士の社会貢献について独自の考えを持つ。

●全体討議

技術士の社会貢献とはいかなるものか、当分科会が最も力点を置いたのが全体討議セッションである。

フロアから技術士の社会貢献に関して次のような意見があった。社会貢献を実現する方法論としてPRの必要性であること、中小企業の中にあってアドバイザーとしての貢献が望まれていること、社会のニーズ把握には視点を大きく変え如何に客観性をもって物事を見る目を養うかが必要であること、技術士に求められる役割はどうしたら地域振興ビジネスに結びつけられるかであること、基礎知識を有する学者と应用能力と広い視野をもった技術士が協力することが大切であること、などである。

以上、建設的な意見が出された反面、これまでの企業活動の中で技術士として社会貢献を感じたことはなかったとする意見もあり、社会貢献の本質的な議論にまでは至らなかった。時を改めて是非、議論したいものである。

●まとめ

日本の地域は「一地方」という普通名詞から、「特色ある地域資源を有した地域」とする固有名詞になることが必要である。技術士はそれを実現するために活動することが必要である。数年後には社会貢献の検証をしたい。



パネリスト 岩崎元彦 技術士



パネリスト 孫田 敏 技術士



パネリスト 岡田 操 技術士



パネリスト 五十嵐敏彦 技術士